

SHOW HEYシネマルーム

★★★★

スノーホワイト

2012年・アメリカ映画
配給/東宝東和・127分

2012 (平成24) 年5月24日鑑賞 試写会・TOHOシネマズ梅田

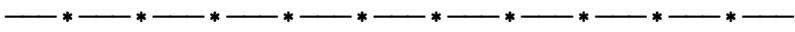
Data

監督：ルパート・サンダース
 出演：クリステン・スチュワート/
 シャーリーズ・セロン/クリ
 ス・ヘムズワース/サム・ク
 ラフリン/サム・スプルーエル
 /ヴィンセント・リーガン/
 リリー・コール/ノア・ハン
 トリー/ラフィー・キャシデ
 イ/イアン・マクシェーン/
 ニック・フロスト/レイ・ウ
 インストン/トビー・ジョー
 ンズ/エディー・マーサン

👁️👁️ みどころ

ディズニーで有名なグリム童話の『白雪姫』が全く新しい解釈下、ジャンヌ・ダルクばりの「戦うスノーホワイト」として登場！主役以上の注目点はシャーリーズ・セロンが魔法使いの邪悪な女王を熱演することだが、ここまでやっていいの？

おなじみの猟師や王子サマそして七人の小人たちもあっと驚く新機軸で登場し、物語を盛り上げるからそれにも注目！はたして、甲冑に身を固め白馬にまたがったスノーホワイトは、クライマックスでいかなる活躍を・・・？



■□■新解釈によるスノーホワイトのキャラに注目！■□■

『白雪姫』はグリム童話の代表作。そんなおなじみの物語がグリム童話誕生200周年の2012年、全く違う解釈の下に、『スノーホワイト』として登場！雪のように白い肌、血のように赤い唇、黒檀のように黒い髪というイメージは私たちがよく知っている可憐な白雪姫のイメージそのものだが、それが本作では「戦うスノーホワイト」に大変身！スノーホワイトを演ずるのは、『ニュームーン/トワイライト・サーガ』(09年)と、その後の『トワイライト』シリーズで大フィーバーしたクリステン・スチュワートだが、そのキャラは？その魅力は？

映画のクライマックスでは、『エリザベス：ゴールデン・エイジ』(07年)、『シネマルーム18』174頁参照)でエリザベス1世に扮したケイト・ブランシェットが馬上で見事な甲冑姿を見せてくれたのと同じように、甲冑姿で白馬にまたがるクリステン・スチュワートの姿を見ることができる。スノーホワイトはなぜこんな姿に？そして、誰を相手に戦うの？こんな白雪姫の新解釈を、またこんなスノーホワイトの勇姿を美しくかつ楽しい

と思うか、それとも違和感を覚えるかはあなた次第！

■□■シャーリーズ・セロンが大胆に変身！■□■

原作では単に意地悪で邪悪なだけの王妃だが、本作でスノーホワイト以上に注目を集めるのが、シャーリーズ・セロン扮する邪悪な女王ラヴェンナ。「鏡よ鏡・・・」で始まる「世界で一番美しいのは誰？」というおなじみの質問に対して、鏡は当初「それは女王様です」と答えていたが、ある日それが亡きマグナス王（ノア・ハントリー）の娘で、今はラヴェンナによって長い間幽閉されているスノーホワイトに取って代わられる時がきたと聞いた時の、ラヴェンナのショックの大きさは？この時鏡は同時にスノーホワイトの心臓を取り出しこれを飲み込めば、ラヴェンナは永遠の美しさと不死を手に入れることができると述べたから、以降ラヴェンナはそのことで頭がいっぱいで・・・。

女魔法使いの娘として生まれたラヴェンナが、美しさを最大の武器として生きていくために魔法を邪悪な道具として使わざるをえなくなったのは仕方ない。そんな邪悪な女王役に、ハリウッドビューティーの代表であるシャーリーズ・セロンが果敢にチャレンジ。本作については公開前からそのニュースでもち切りだった（？）が、これについても、「40歳近くになればそれも仕方ないさ」とすんなり受け入れる人と、「まだまだ美人役でやってもらいたいのに・・・」と残念がる人に分かれるのでは・・・。

■□■七人の小人以上に、ハンターのエリックがキーマンに！■□■

本作では、魔法をかけられた黒い森を知り尽くしている男であるハンターのエリック（クリス・ヘムズワース）がキーマンとして重要な役を果たすから、それに注目！原作に登場する猟師は、王妃から白雪姫を殺し心臓を取ってくるよう命じられたのに、いざとなると白雪姫を不憫に思い、代わりにイノシシの肝臓を持って帰る役割。ところが本作では、森の中でスノーホワイトとさまざまな行動を共にする中で奇妙な信頼関係が生まれた後、スノーホワイトが亡き国王の娘だとわかるとエリックは俄然彼女のために忠誠を尽くすナイトに変身する。

他方、原作ではしつこく白雪姫の命を狙ってくる王妃から白雪姫を守るのは七人の小人たちで、森の中における白雪姫と七人の小人たちの共同生活が美しいファンタジーの世界を生み出していた。ところが本作では、この七人の小人たちの役割はハンターであるエリックの役割が大きくなる分だけ、逆に小さくなっているのが要注意。ちなみに七人の小人を演ずるのはイギリスの名優たちらしいが、小人になっているのは映像上の特殊撮影のため決して彼らの身体に異変が起きたわけではないから、余計な心配はしないよう・・・。

■□■2つの小道具の使い方にも注目！■□■

女性が四六時中、鏡に自分の姿を映してみるのとは昔も今も同じだろうが、白雪姫のお話では、王妃が問いかける鏡はストーリー構成の大切な小道具。原作では、いかに語りかけるとはいえ鏡はあくまで鏡だが、映画では鏡の姿は変幻自在だからその映像に注目！

他方、『ウィリアム・テル』の物語でもりんごが大切な小道具となるが、それは白雪姫の原作でも同じ。白雪姫の母が雪のように白い肌、血のように赤い唇、黒檀のように黒い髪、を持つ子供を欲しいと願ったのは、針仕事中に針を指に刺し、その赤い血が白雪の上に滴ったのを見たため。したがって本作では、美しい映像の中でこの白、赤、黒の各色が強調されることになる。もっとも、赤色は血だけではなく、もう一つの小道具たるりんごの象徴でもあるが、本作でそれはどんなシーンで？原作では白雪姫の殺害に成功したというウソの報告に聞き飽きた王妃が、自らりんご売りに変装して白雪姫に毒りんごを食べさせることによって白雪姫の殺害に成功する（もちろん一時的に）が、さて本作では？

『ロミオとジュリエット』の物語では2人が同じ比重で描かれているが、白雪姫では王子様は死亡した白雪姫に一目ポレシ、死体をもらい受けるためだけの役だからウエイトは小さい。その王子役が本作ではスノーホワイトの幼馴染のウィリアム（サム・クラフリン）だが、彼の父親はあくまで国王の家臣だからウィリアムを王子と呼ぶのは少しムリがある。また、スノーホワイトが赤いりんごを食べることによって息絶えるのは原作と同じだが、本作でスノーホワイトにそれを食べさせるのは一体誰？こちらのストーリー構成も少しムリがあると思うが、さてあなたの意見は？



2012年6月15日（金）よりTOHOシネマズ梅田他全国ロードショー
©2012 Universal Studios. All Rights Reserved.

■□■なぜ死の淵から復活を？■□■

スノーホワイトが生きていると聞いたウィリアム王子は、あえてスノーホワイト追跡隊の隊長になっているラヴェンナの忠実な弟フィン（サム・スプルエル）の指揮下に入りスノーホワイトを捜す旅に出るが、結局ウィリアムとエリックの目の前でスノーホワイトは息絶えてしまうから、子供の頃に一度スノーホワイトを見放したのと同じように、ウィリアムはスノーホワイトを救いだすという任務を再び果たせないことになってしまう。原作では、白雪姫が死の淵から復活するのはある偶然によってのどに詰まっていたりんごのかけらを吐き出すからだが、本作でスノーホワイトはどのようにして死の淵から復活を？

■なぜ「戦うスノーホワイト」に変身?■

魔法をかけられた黒い森の中をエリックと転々と歩く中で、スノーホワイトは徐々に鍛えられたくましくなっていたが、死の淵から復活したスノーホワイトはなぜ自分が「選ばれし者」であることを急に自覚し、打倒ラヴェンナのために立ち上がるの? 百年戦争下にあった15世紀半ばにオルレアンに生まれた少女ジャンヌ・ダルクは、神の啓示を受けたことによって打倒イギリス、シャルル7世の即位のために立ち上がり、類いまれなるリーダーシップで民衆を率いたが、本作に見る国民に決起を促すスノーホワイトの演説はどこかの国の総理大臣に聞かせたいほど凛とした迫力がある。それに聞き入った国民は演説が終わると自然に膝を折り、スノーホワイトを亡き国王の後継者と認める姿勢に。その結果、どこから調達したのかは不明だが、スノーホワイトたちは見事な甲冑に身を固めた騎馬隊となってラヴェンナの居城への進軍を開始することに。

これ以降の、戦うスノーホワイトの晴れ姿は、じっくりあなた自身の目で。童話ではハッピーエンドが待っていることが当然の約束事だが、本作ではそればかりに注目せず、ラヴェンナに扮するシャーリーズ・セロンの死に姿にも注目!

2012(平成24)年5月29日記

「第三極」の連携を含む政界戦争は?

1) 今や野田総理と谷垣自民党総裁(当時)との「近いうち解散」の約束(?)は反古同然とされ、衆議院の解散総選挙は衆議院で内閣不信任案が可決されるか否かにかかっている。橋下徹大阪市長を代表とする「日本維新の会」の勢いは関西では突出しているが、関東・東北・北海道ではイマイチ。国政政党化を実現させ、着々と候補者選びも進めているが、脱藩浪士(?)による現有の国会議員団は小つぶなくせに口だけ達者なためか、一時の爆発的勢いを失っている。そんな中で注目されるのが、石原慎太郎東京都知事が立ち上げる予定の「石原新党」。これは「たち上がれ日本」を衣替えするものだが、さてその行方は?

2) 長年続いた自民政権を倒し19

93年8月に成立した細川護熙連立政権には大きな期待が集まったが、もろくも瓦解。その後の「政治改革」の中で小選挙区制が導入され、2009年8月31日のマニフェスト選挙によって政権交代が実現した。そしてその後の本格的二大政党制が期待されたが、民主党の未熟さが露呈してしまったため、次の総選挙では再度の「政権交代」が必至だ。

3) そこでの注目は、みんなの党・減税日本・国民の生活が第一を含む「第三極」の連携だが、それぞれ個性豊かな一匹狼がリーダーを務めているため、その前途は多難。かつて中国の春秋戦国時代に、合従連衡の挙げ句、最後に勝利したのは秦だったが、さて日本では?

2012(平成24)年11月1日記